

「07年問題」に誤解
8割は働き続ける

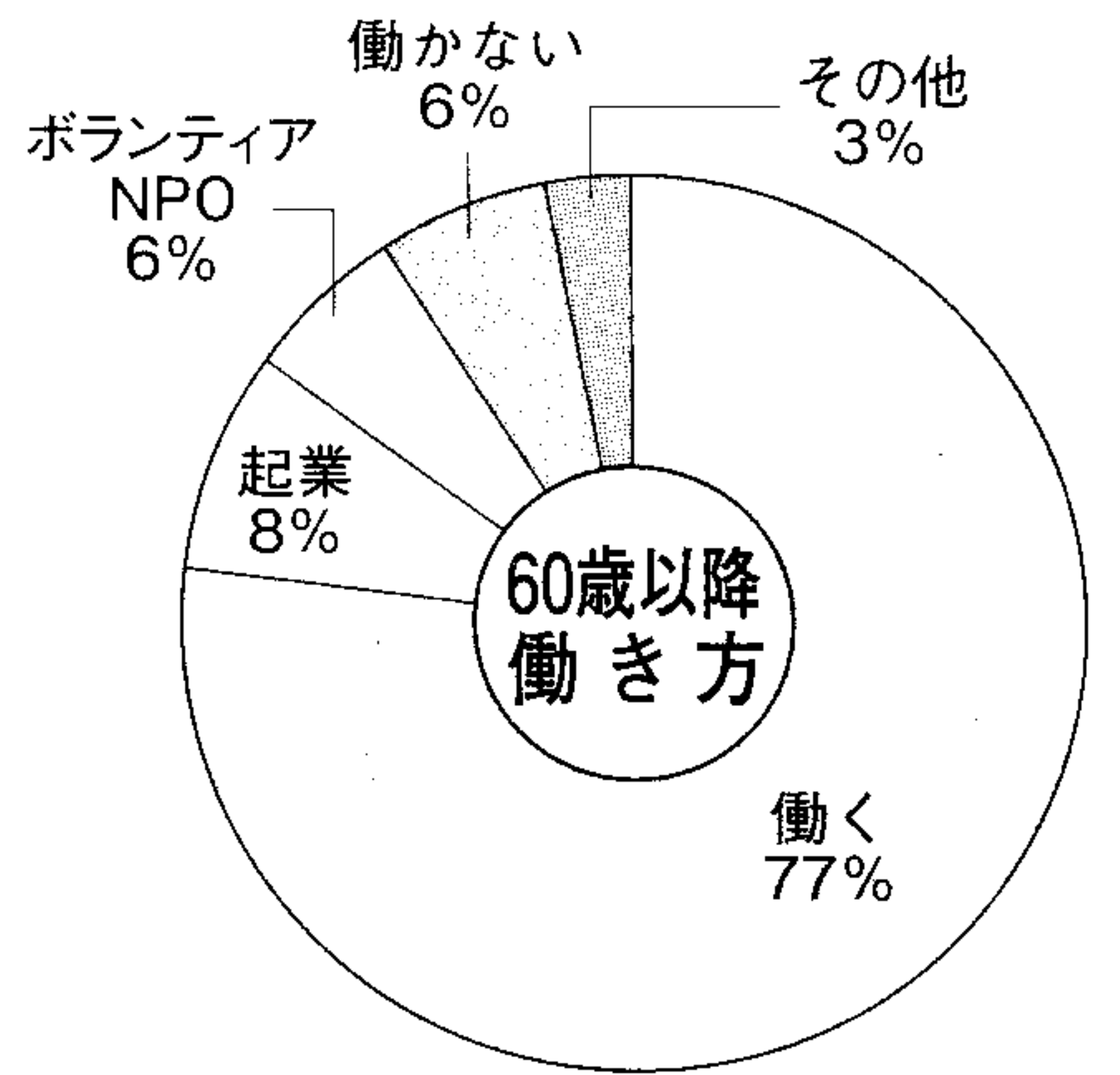
「二〇〇七年問題」という言葉が、マスコミなどで取りざたされている。二〇〇七年に団塊世代の最年長者が六十歳になり、一斉に定年で退職するといわれている。ところが、実態は違う。団塊世代の約八割は六十歳になっても当面退職することなく、今いる職場で働き続けると述べている。これは筆者による試算（『週刊エコノミスト』〇六年一月十七日号）二〇〇七年問題再考 団塊世代『一斉退職』は本当か」や電通による最近の調査「グラフII」でも明らかにしている。

第一の理由は高齢者雇用安定法の改正による定年の制度的延長。第二の理由は早期退職の増加。第三の理由は、団塊世代の女性の多くが、過去の昔に退職していること。さらに働き続けている団塊女性の多くは、派遣労働者やパートタイム労働者であり、これらの人々にも定年退職はない。以上の三つの理由から、団塊世代が〇七年に一斉に定年退職するというのは、正しくない。そして、いつまで仕事を続けるかは、子供の養育費や住宅ローン残高など個人や家族のライフ

ステージの変化、本人が満足できる職場との出会いなどの個人的理由に大きく依存していく。こうしたことから、団塊世代の退職時期は〇七年に集中せず、分散すると予想される。

リタイア・モラトリアムの始まる年

団塊世代の約八割は当面退職することなく、今いる職場で働き続けると述べた。ここで注意したいのは、今いる職場で働き続けると



調査対象：1947年生まれの男性および当該男性を夫に持つ女性
出典：電通「退職後のリアル・ライフII」

この段階にはこれまで「解放型ライフスタイル」家族や職場の都合を優先し、世間体などを気にして抑制してきたことを実現し、何かこれまでと違ったことがしたい「今やるしかない」といった気持ちが強まる（詳細はジーン・D・コーエン著、筆者が、会社で働くのが嫌な人へのいわば「マイ・オフィス」だ。これは「上司からの解放」の受け皿を商品化したものといえる。また、このような「脳の内部の生理的変化」と「心理面の発達」とが相互に影響を及ぼすことで「抑制からの解放」が求めているのは多様な

解放型ライフスタイル志向

村田裕之氏が分析・予測



村田裕之氏代表、財団法人社会開発研究センター理事長、東北大学特任教授

起る。最近の脳研究によると、五十代から七十代に脳の海馬における樹状突起の数や密度が最高潮に達する。これが団塊世代の〇七年以降のライフスタイルを業績を伸ばすだろう。

は、自分周辺の同世代の多様なリタイア・パス（キャリア・パス）に対する言葉。リタイアまでの順序・経歴を横目で眺めつつ、自分のことをいろいろと考えながら働き続けるという「心理的に不安定な状態」

「自由」と「遊び心」を取り戻す思い強く

「心理的に不安定な状態」なる。つまり、〇七年は団塊世代の多くの人のために

「自由」と「遊び心」を取り戻す思い強く

海馬 脳の器官の一つ。入力された情報の整理・取捨選択と記憶をつかさどっている。

樹状突起 神経細胞から木の枝のように分岐しながら広がり、他の神経細胞などから信号を受け取る働きをする。